

出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

令和3年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター

令和3年11月

富 山 県

目次

🌀 心の輪を広げる体験作文入賞作品

最優秀賞

中学生の部

障害は神様からのギフト

高岡市立戸出中学校 三年

森岡 早耶音
…………… 1

高校生の部

人助け＝良いこと

富山県立南砺福野高等学校 二年

松井 彩吹
…………… 3

優秀賞

中学生の部

見えない壁をなくすには
個性を大切に

高岡市立戸出中学校 三年
高岡市立国吉義務教育学校 九年

田園その 中田なか 心涼こころず 寧香ねか
……
……
……
……
8 6

高校生の部

障がいのある方たちとの出会い
コミュニケーションを通して

富山県立南砺福野高等学校 三年
富山県立南砺福野高等学校 二年

嗟久さく 峨保がほ 楓音ふうの 菜乃な
……
……
……
……
12 10

障害者週間のポスター入賞作品

最優秀賞

中学生の部

人と人が支え合う

射水市立小杉南中学校 二年

古城優来

15

優秀賞

小学生の部

持っている力を出し合って

氷見市立宮田小学校 四年

前田哲将

16

中学生の部

よりよい社会へ

手を失ったって

射水市立小杉南中学校 二年

高曾根鷹也

参考資料

令和三年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領……………17

令和三年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況……………20

令和三年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿……………21

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

「障害は神様からのギフト」

高岡市立戸出中学校 三年

もり おか さやね
森岡早耶音

私の祖母はリュウマチを患っています。リュウマチとは、関節がうまく動かなかったり、骨が曲がってしまったりする病気です。

祖母は、昔は床屋を経営していましたが、リュウマチにかかってはさみを持つことができなくなり、美容師を続けることができなくなりました。

リュウマチの症状が進んでいつ箸が持てなくなったため、食事のときはフォークやスプーンを使うようになりました。また、じゃんけんをするときも、グーやチョキを出すのは難しくしてパーしか出せません。これは手をきちんと握ることができなかったり指先の細かい動きができないということにつながります。そのため、重い物を運ぶときや細かい作業をするときは私や弟が手伝うことが多いです。

私は小学校に入るまで、祖母が障害者だということを理解

していませんでした。私が物心ついたときにはすでに祖母はリュウマチにかかっていたので、私は手足の動きが不自由なのはお年寄りなら当たり前だと思っていたのです。だから、母から祖母の障害について初めて聞いたときは少し驚きましたが、祖母の優しさを知っている私は、祖母は普通のお年寄り「特別」なのだと思います。

小学校五年生の時、私は友達と一緒に祖母の家に遊びに行きました。祖母の手足を見た友達は、

「おばあちゃん障害者なんだ。かわいそう。」と私に言いました。その時、私は友達が祖母に対して言った「かわいそう」という言葉が理解できず戸惑いました。それと同時になぜかむかついてしまいました。

私は、祖母のことを「かわいそう」だと思ったことが一度もありません。だから、友達の言葉から伝わった、「障害者」

かわいそう」という考えがショックでした。この時私は友達に対して、

「そうだね。」

と苦笑いすることしかできませんでした。

友達が帰った後、私は祖母に、

「おばあちゃんは自分が障害者だからかわいそうだと思ったことがある？」

と聞きました。質問した直後に、なんて失礼なことを聞いたのだろうと思っていると、祖母は笑顔で、

「自分や障害者のことをかわいそうと思ったことはないよ。だって、障害は神様からのギフトだからねえ。」

と言いました。この言葉を聞いたとき、私は泣きそうになりました。祖母を支えてくださる周りの方々と祖母との、お互いを思う優しさを感じたからです。

障害がある祖母は周りの人に支えてもらうことが多いのでしよう。そして、そのことを祖母はきつと心から感謝しているのでしょう。周りの人の温かい気持ちや優しさにたくさん触れられる自分の幸せを感じ、その幸せは障害のおかげ。祖母はそんなふうを受け止めているのかもしれない。障害を前向きに受け入れて明るく生きている祖母のことがもっと大好きになりました。

しかし、障害を受け入れられなかったり、障害があるというだけで差別をされ、辛い思いや悲しい思いをしたことがあるという方もいらっしゃると思います。そんな方々も、笑顔で明るく笑顔で暮らせるような温かい世の中になってほしいです。そのために、「障害は神様からのギフト」という考え方が世界中に広がるように願います。そんな世の中に近づぐために、自分にできる小さなことをしていきたいと思います。

「人助け＝良いこと」

富山県立南砺福野高等学校 二年

まつ い い ぶき
松 井 彩 吹

ある日の、帰り道だった。電車通学の私は、最寄り駅で降りて、家に帰る。帰りは、向かい側のホームに行かなければならないので、階段を登る。普段通り電車を降り、階段を登ろうとしたときだった。荷物を持った七十代くらいのおばあちゃんがいた。おばあちゃんは、とても辛そうな顔をして、階段を一段、二段とゆっくり登っていた。田舎に住んでいる私は、老人が階段を登っている光景には、見慣れていた。困っていたら声をかけるのも普通だった。私は、いつもと変わらず、

「大丈夫ですか？何かお手伝いしますよ。」

と、声をかけた。するとおばあさんは、

「なん！私できるわ！助けなんかいらん！」

と、私に強く言い放った。まさかそんなことを言われるとも思わず驚いた。ただ、人助けをしたかっただけなのに。人助

け＝良いことと思っていた私は、少しショックだった。でも辛そうで、今にも泣きだしそうなおばあちゃんを放っておくことはできなかった。私の中で引つかかった言葉は、でも何か助けてあげたいという気持ちに変わった。

「じゃあ、そばにいらさせてください。何もいません。そばで見守らせてください。一人ぼっちより人がいた方が良いじゃないですか。」

そう言うと、渋々うなずいてくれた。ゆっくりと階段を登り踊り場まで行ったときだった。

おばあちゃんは、スツと力が抜けたかのように、膝から崩れ落ちた。突然のことに驚き、急いでおばあちゃんを支えた。

おばあちゃんは、少しほほえんで静かに話し始めた。

「私、閉塞性動脈硬化症でね。難しい名前やろ。その病気のせいで足が悪くて。よくこういうことが起きるんやちゃ。ご

めんね、びっくりしたやろ。」

難しい病名がスラスラと並べられ、おばあちゃんの話についていくのに必死だった。そんなことにかまわず、おばあちゃんは話を続ける。

「まあ簡単に言うたら、下半身の動脈がつまったり、狭くなったりして酸素が十分に行き渡らん病気がいぜ。そうやさかい、間欠性跛行言う症状出るもんで。」

もう、わけがわからなかった。

「歩くことはできる。でも、痛て痛て。少し休めば歩けるよくなるんやけど…。」

そうおばあちゃんは説明してくれた。聞いたことのない病気に症状が脳内をぐるぐると回る。こんなところで話しているもキリがないと思っておばあちゃんに声をかける。

「おばあちゃん。ゆっくりでいいので、あっちのホームに行きましょう。ベンチに座って話しませんか？」

おばあちゃんは、少し元氣そうにそうしよかと、言った。ゆっくり一段ずつ、休憩しながら、反対側のホームに渡った。

改札をくぐりベンチのある待合室に行き、二人でゆっくりと腰かけた。

「さっきは大きな声出してごめんね。恥ずかしいことやけど、できんこと認めたくなくて。人に助けてもらおうと自分に障害

がある言うて、実感してしまうのが怖くて。」

声の大きさがだんだん小さくなってるのがわかった。そのときやと気づいた。なぜあるとき大きな声で言われたのが。気づくと同時に悲しくなった。特に障害を持っているわけでもない。でも、なぜか悲しくなった。気持ちが何となくわかったから。できないことから目を背けたくなる気持ちが。私は、おばあちゃんのシワだらけの手を握った。

「その気持ちわかります。おばあちゃんほど、大きなことじゃないけど。障害があってもなくても気持ちは変わらないんですね。」

おばあちゃんは少し嬉しそうに手を握り返してきた。心がつながった気がした。障害の有無に関係なく、一人の人間として尊重するべきだと思った。

「強く当たってごめんね。あなたみたいな人で良かったわ。本当は嬉しかったのよ。認めたくなかっただけで。あなたみたいな人が増えると良いわね。障害の有無によって辛い思いをする人もたくさんいるから。ありがとう。」

おばあさんは、ゆっくり立ち上がり荷物を持ってタクシーに乗って行ってしまった。最初に見たときは正反対な笑みをうかべていた。心があたたかくなったような、チクリと痛んだような。障害の有無は仕方ないと言ってしまえば、そこま

でだ。でも、接し方や考え方によっては、全く変わらない一人の人間だということを忘れてはいけない。障害にも様々なものがある。未だに、身体障害者は、接することができるけど、知的障害や精神障害の人は怖い、接しにくいと言う人がいる。正直私も少し前まではそう思っていた。でも、接してないだけで同じ人間だし、一日の価値だって、命の価値だって変わらないと思う。

全員じゃなくていい。考え方に違いがでてくるのは当然のことだから。でも少しでも偏見がなくなってほしい。みんなが対等に生きることができるよう。人助け＝良いことは、間違いではないけど、慎重に考えていかないといけない。私の頭の中は、そのことではいっぱいだった。

「見えない壁をなくすには」

高岡市立戸出中学校 三年

その
だ
す
ず
か
園
田
涼
香

「障害者、健常者という言葉自体が壁をつくっている。私はその言葉を聞いたとき、衝撃を受けました。」

私は今まで、様々な障害をもっている人に出会ってきました。発達障害、知的障害、身体障害など、どれも私たちのように生活するのは難しい様子でした。私は以前、この「心の輪を広げる体験作文」で受賞したとき、受賞式に参加しました。私はそこで下肢不自由障害を患った男の子に出会いました。母親や周りの大人の助けを借りながら、立ったり、座ったり、歩いたりしていました。動きこそぎごちないものの、慣れた様子で一つ一つの動作を行っていました。私はそんな彼のとくましさに驚きました。

彼も作文で受賞しており、その作品を受賞者代表としてスピーチしました。彼自身の身体と経験についてでした。その中に、私の胸をうつ一言がありました。

「そもそも、障害者、健常者という言葉自体が壁をつくっているのです。」

私は、その一言で受賞会場の空気が一変したのを感じました。思うように歩けない足で堂々と立ち、ハキハキと大きな声で話す彼は、どんな健康な人間よりも大きく、強く見えました。

私は今まで障害者に関する作文を何度か書いてきましたが、今思い返せば、どれも「障害者」、「健常者」という言葉を使っています。私は恥ずかしくなりました。障害者と健常者の壁をなくしたい、同じ人間として平等に生きていきたい、そんな社会をつくりたい、と言っているながら、自分自身が、「障害者」、「健常者」というくくりで人をまとめ、壁をつくっていたことに気付かされ、忘れられない出来事となりました。そして私は、第一に障害をもつ人の気持ちを考えることが大事だと気付きました。私は障害をもつ知り合いに、

「障害者って言われるの嫌？」

と聞きました。やはり答えは

「うん。差別されてる感じがして嫌。」
でした。

障害をもたない人は、自分が思っているよりも障害をもっている人の気持ちに気づけていません。一人一人が、それぞれの不自由と一生を共にし、生きていくこと。それはきつと、想像よりもはるかに大変なことで、障害者と言われ続けることが、その大変さ、苦しさを倍増させているのではないかと思いました。

男の子の話や知り合いの意見を聞いて、気づいたことがあります。それは、障害をもつ人の心の奥深くにある気持ちに気づいてあげなければいけないということです。その思いが適切なかはわかりません。しかし、あの男の子のように、はっきりと胸の内を話してくれると、私が「障害者、健常者」という言葉自体が壁をつくっている」という言葉に胸をうたれたように、ちょっとした言葉で心を動かされる人がいると思います。そうすると、少しでも、「障害」というものへの価値観が変わって、サポートしてみよう、障害について考えよう、と思ってくれる人が増えるはずです。こうして少しずつ、周りの人たちに協力してもらい、見えない壁をなくしていけ

たらしいなと思います。

「個性を大切に」

高岡市立国吉義務教育学校 九年

田 中 心 寧
た なか こころ ね

二〇二一年、夏…。東京二〇二〇、パラリンピックも開催されています。テレビでは、障害をもつアスリートが、肉体を限界まで駆使して、最高のパフォーマンスを見せてくれています。私よりも早く走る義足のランナー。私よりも正確にゴールを決める車いすのバスケットボールプレイヤー。障害がある人ない人関係なく活躍しています。

私は「障害」という言葉に、多くの人が偏見をもっていると感じています。同じ人間なのに。私の周りの人が悪ふざけで障害がある人を馬鹿にするような発言をしていて、とても悲しくなりました。「障害」があるというだけで差別が生まれてしまうのは、私自身、とても不快です。

私自身、ADHDという発達障害の可能性が高いと思っています。ADHDとは、不注意(物事に集中できない、忘れ物が多い)、多動性(落ちつきがない、じっとしてられない)、

衝動性(突飛な行動をとる、順番を守れない)などを特徴とします。

私は昔から「変わっているね。」などと言われることが多かったです。初めは気にしていませんでしたが、思春期に入ると、自分はどこか人と何か違うのかなと感じ始めました。昔からじっとしているのは苦手だったし、物事に長く集中できないタイプでした。そして、自分でいろいろと検索していくうちにADHDの存在を知りました。

あるとき、自己診断ができたのでやってみると、「可能性は高いです」という結果になりました。実際に目にしてみるとドキッとなりました。それから、いろいろなサイトで試してみました。何回やっても同じような結果で、とても不安になりました。病院行って判断してもらおうのも一つの手だと思いましたが、「障害」のせいにして生きていきたくないなど考

えたので、病院には行かず、個性と考えて生きていこうと思
いました。そしたら、今まで不安だった気持ちも少し軽くな
りました。だから、今、障害について悩んでいる人がいたら、
個性として考えると気持ちも軽くなるかもしれません。違っ
ていたって、すべて個性。個性を大切に生きていきたいです。
個性だと思って、しっかりと特性とかも調べて理解したら、
とても楽になりました。

そして、私は周りの大切な人だけにカミングアウトをしま
した。なんて言われるのかとても不安でしたが、

「ここねは、ここねだもん。」

と言われ、安心して涙が出そうになったのを覚えています。
障害がない人も、障害のことを良く理解して、偏見をもたず
に接してくれるとうれしいと思います。変に特別扱いせずに、
ただ普通に。

私は、障害がある人となない人の心がふれあうのに大切な
は、思いやりだと思います。何か不自由なところがあれば、
助けたり、どちらの立場でも、お互い様という気持ちで、思
いやりのある行動を心がければ、心もふれあえるし、お互い
によい気持ちにもなれると思います。障害があろうとなかろ
うと、誰でも思いやりの心は大切です。私は、「障害」という
言葉に囚われないで、「個性」として生きていける世の中であ

ってほしいと思います。私も思いやりを大切にして生きてい
こうと思います。私にとつての思いやりとは、相手の身にな
って考えたり、推察して気遣いをしたりすることです。みん
なが個性を大切にして、明るく生きていける世の中でありま
すように。

「障がいのある方たちとの出会い」

富山県立南砺福野高等学校 三年
久保音乃

私は、福祉系高校に通っています。三年間で、高齢者施設や放課後デイサービスなどいろいろなところにボランティアに行きました。さらに、六十一日間の実習にも行きました。そこでたくさん障がい者の方に出会い、いろいろな気づきや発見がありました。

ボランティアでは障がいのある子どもたちが印象に残っています。私は、ボランティアに行く前は障がい者に対して「怖い、何をされるか分からない」といった不安や恐怖を持っていました。この不安を抱えたまま、私はボランティアに行きました。しかし、実際に関わってみると障がいのある子どもも変わらないと一番に感じました。全てが変わらないわけではなく、もちろん変わっている部分もありました。しかし、障害がある子ども障害がない子どもと同じように、みんな優しく、ありがとうやごめんねと言える思いやりの心を持つ

ていました。実際関わってみることで自分が持っている不安や恐怖などのマイナスな印象がなくなりプラスの印象に変わりました。

実習では目に障がいを持っている高齢者の利用者の方と出会いました。三年生の実習では受け持ち利用者の方を決め、介護計画を立案し実施、評価するというを行いました。私が受け持ち利用者の方に選んだ方が左半側空間無視と右目に弱視を患った方でした。これといった趣味や好きなことがなく日中は居室で寝て過ごされていました。コミュニケーションをとっていくうちに「目が見えないから」や「目の都合悪いかから」とおっしゃることがありました。その時は利用者の方の中で目が見えないから何もできないと日常生活に楽しみを持つことに諦めが出てきているのではないかと感じました。目が見えなくてもできることはきっとあるはずだと思

いました。目に障がいがあっても生きがいを持って楽しく施設で生活していただきたいと思いい利用者の方ができそうな活動を考え実施しました。受け持ち利用者の方はやる気が低い方であったため、ベッドでできるしりとりや連想ゲームを好まれると思っていました。結果的に箱の中身は何か当てるゲームやサッカーなど体を使ったレクリエーションを気に入ってくださいました。特にサッカーはボールがどこにあるか目で見て蹴るため難しいと思っていました。しかしボールの中に入っている鈴の音を頼りに足でボールを探しながら何回もゴールめがけてボールを蹴っており利用者の方も「いつものしないことをして楽しい」とおっしゃっていました。目が見えにくいから障害があるからできないのだと最初から本人や周りが決めつけるのは、本当はできることや楽しいと思えることをその人から奪っていることと一緒だと支援を展開して感じました。目が見えなくても、できなくてもなんでもやってみることで新たな楽しみやできることを発見することができるといことを利用者の方から学びました。

また、ボランティアと実習に行きいろいろな年代の障がい者の方と出会い共通して分かったことがあります。それは、先入観で物を見ていたということです。高校で勉強する前の私は障がい者に対して先入観からのマイナスな印象が強く、

できたら関わりたくないと思っていました。また、目が見えないから道具を使った活動は好まないのではないかと、口頭でできる活動のほうがいいのではないかと勝手に考えしりとりや連想ゲームのほうが好きだろうと先入観で決めつけていました。しかし、実際に関わったり支援を行うことで、マイナスな印象がプラスに変わったり、体を動かす活動のほうが好きだったりして、先入観で物ごとを決めつけるのはよくないことだと障がい者の方や利用者の方との出会いから学びました。

障がい者の方たちとの出会いは、私の将来やりたいことを見つけるきっかけにもなりました。社会福祉士の立場から障がいがあるない関係なく、地域で暮らす住民がつながりあい暮らしやすい地域を創ることです。福祉の力を使って障がいのある人もない人も誰もが暮らしやすい地域とはなにか考えていきたいと思っています。そのためにも、これからは障害のある方たちと関わり障害についての理解を深めるとともにいろいろな人たちに伝えていきたいです。

「コミュニケーションを通して」

富山県立南砺福野高等学校 二年

嗟さ 峨が 楓ふう 菜な

果たしてコミュニケーションとは会話することだけなのだろうか。発語ができないとコミュニケーションはとることができないのだろうか。言いたいことを言えないと思いを伝えることはできないのであろうか。

私は介護福祉士になるための勉強をしに福祉科に通っている。介護福祉士国家試験を受験するために施設に実習に行くことがある。一年生の冬に障害者支援施設で実習させていただいた。まだ二回目の実習ということでコミュニケーションが中心の実習だった。私の行った実習先では障がいを重複して持つておられる方が多く要介護度が高い方一人ひとりに挨拶をしに行った。利用者の方は返事をしてくださったが、はつきりと発語をすることが難しいようだった。私は利用者の方がどのようなことを言っておられるのか聞き取ることができなかった。職員の方は毎日利用者の方と時間を過ごしてお

られるためどのようなことを言われたのか慣れで聞き取っておられた。しかし私は実習生であり利用者の方とはまだ初対面だったため職員の方のようにコミュニケーションをとることはできなかった。最初は職員の方が利用者の方の言っておられることを教えてくださっていた。

これから二人の利用者の方とのコミュニケーションについて紹介しようと思う。

まず一人目の方についてだ。この利用者の方は大きな声を発することが困難だった。実習二日目、職員の方に利用者の方と一緒に塗り絵をしてほしいと指示を受け塗り絵をするこ
とになった。その時私は、

「塗り絵なら利用者の方に好きな色を選んでいただけて自己決定を取り入れられる。」

と思っていた。しかし一緒に塗り絵をすることになった利用

者の方は手指の筋緊張が強くペンを上手く握ったり動かしたり、発声が難しい方だったのでどうやってペンの色を選んでいただけたらよいかわからなかった。すると職員の方が一度見本をしてくださった。ペンを両手に何本か持って、

「Aさん、ここに塗る色はどちらの色がいいですか。」

と言って示しておられた。すると利用者の方は使いたい色のペンがある方へ視線を向けておられた。これを繰り返すことで視線のみでも使いたいペンを選ぶことが出来ると分かった。そして利用者の方の手を握って一緒に塗っておられた。手が全く動かないときは介護者が塗るが、色は利用者の方が決めたものなのでその方の作品になることが分かった。この利用者の方のように大きな声が出ない、手を動かすことが難しいような障がいを持っておられても方法を変えてみると利用者の方の思いを尊重して行うことができると思った。このペンの色を決めるときの方法はコミュニケーション中にも使うことができる。両手を出して二択の質問をし、手に選択肢を置くことで視線を向けてくださり利用者の方の思いを引き出すことができる。

次に二人目の方についてだ。この利用者の方は何とか聞き取ることはできる程度の発語はできるが、やはりはつきりと話すことが困難な方だった。最終日のときのことだった。利

用者の方に挨拶するとき

「私、今日でここに来るのは最後なので少し寂しいです。」

ということを伝えた。そして他の方にも挨拶に行くので離れるように伝えた。すると利用者の方は、私の服をつまみ、何かを伝えようとするように大きな声を出しておられた。何度か聞き直すと、「とりたい」と言っておられることが聞き取れた。なにをとりたいのか聞いてみると私の手のひらをとって「しゃしん」と指で書いてくださった。利用者の方は一緒に写真を撮りたいのだと伝えてくださったことが分かった。このことから声をあげておられることは何かを伝えようとしている利用者の方なりの意思表示の手段であることが分かった。

これらのことから一人ひとりの障がいの状態に合わせてコミュニケーションの方法を工夫することが大切だと気付いた。障がいがあるから伝えたいことが伝えられないと考えるのではなく、障がいのある方もない方もその方なりの伝え方で対応することで特別に介護技術がなくてもコミュニケーションはとることができると考えた。このことを障がいのある方に対して話を通じないなどの偏見を持っている方に伝えたいと思った。そして障がいのある方とない方とのコミュニケーションが増えると差別や偏見がなくなり距離が縮まるのではな

いかと思う。福祉に携わる人以外にもコミュニケーションは
会話だけでなく、他の方法でも思いは伝えられるということ
を実際に体験して気づいてほしいと思っている。

障害者週間のポスター



【中学生の部】

○最優秀賞

「人と人が支え合う」

射水市立小杉南中学校 二年

ふる しろ ゆ ら
古 城 優 来

○優秀賞

【小学生の部】



「持っている力を出し合って」

氷見市立宮田小学校 四年

まえ だ てっ しょう
前 田 哲 将

【中学生の部】



「手を失ったって」

射水市立小杉南中学校 二年

たか ばたけ み う
高 島 美 羽



「よりよい社会へ」

高岡市立志貴野中学校 三年

そ ね たか や
曾 根 鷹 也

令和三年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

2. 主催

内閣府、富山県

3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

5. 募集テーマ

- (1) 心の輪を広げる体験作文
出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう——
- (2) 障害者週間のポスター
障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

6. 応募資格

- (1) 心の輪を広げる体験作文
小学生、中学生、高校生及び一般（特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）
- (2) 障害者週間のポスター
小学生及び中学生（特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

7. 募集の方法

- (1) 心の輪を広げる体験作文
① 作文の題名（タイトル）及び内容

作文の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。
なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア. 一編あたりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

イ. 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙(B4判又はA4判。縦書き)を使用する。

ウ. パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ.に準じるものとする。

エ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六四四四一〇二二三

⑥ 募集期間

令和三年七月一日(木)から九月一日(水)までとする(当日消印有効)。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名(タイトル)及び内容

作品の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

② 募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③ 規格、画材、作成方法等

ア. 規格は、画用紙B3判(横三六四mm×縦五一五mm)又はいわゆる四つ切り(横三八二mm×縦五四二mm)を使用し、これに満たない作

品は、B3判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。
イ. 彩色画材は、自由とする。

ウ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年又は職業）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和三年七月一日（木）から九月一日（水）までとする（当日消印有効）。

8. 選定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月二十四日（金）までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。

9. 表彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千元相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

令和3年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小学生	0 編
中学生	43 編
高校生	82 編
一般	0 編
合計	125 編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小学生	1 点
中学生	33 点
合計	34 点

令和三年度

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生 元水橋郷土史料館長

島崎 俊哉 富山県有美術品管理事務員

水井 勤 富山県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉・ボランティア振興課長

布尾 英二 富山県身体障害者団体協議会会長

平野 幹夫 富山県手をつなぐ育成会常務理事

中村 喜久男 富山県精神保健福祉家族連合会理事長

小森 洋 富山県厚生部健康対策室精神保健福祉主査

青山 徹 富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事

辻井 秀幸 富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和三年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター